


 ずいそう

ベッドルームで世界一周

宮 脇 清



日本人の内向き志向が話題になっている。特に若手社員の志向は海外より安住できる国内勤務が強いと言われる。その観点から見ると、もともと海外志向であった自分はいかにも古い世代の人間に入るようだ。多少思い出話になることをご勘弁願った上で、文字通り「随想」を記してみたい。

私の父は自ら出不精を自認し、子供のころの旅行は一年ごとに箱根、伊豆の厚生施設を交互に訪れるだけであった。その反動で旅行は自分でするようになった。小学生のころは鉄道模型の好きな友人と16番ゲージの鉄道模型を楽しんだが、次々と新たな車両を揃える裕福な家庭の友人にはかなわず、次第に私は鉄道写真に傾注した。父から譲り受けたハーフサイズのカメラを手に、小学生の自分は関東一円、鉄道の写真を撮るため走り回った。大学に入ると、ハーレーとはいかなかったがアメリカンスタイルのオートバイを購入。ツーリングを趣味とし、大学後半にはオートバイでの日本一周を目指した。最初の夏休みに南半分、次の夏休みに北半分、一筆書きの要領で全ての都道府県に足を踏み入れるとのルールを作り1都2府43県、合わせて4ヶ月半ほどかけ完走した。

社会人となり20代後半、機会があり80日間世界一周ならぬ3ヶ月間世界一周の旅に出た。世界地図を見ながらこれも一筆書きの要領で移動し、最低5大陸に足を踏み入れることで世界一周と考えルートを作成。興味とスケジュール、そして緊縮予算を熟慮の末23カ国に決定。直行便で行かれない場合の経由便、国内便を含め46枚の航空券を購入し旅に出た。

アメリカを起点にオセアニア、アフリカ、ヨーロッパ、アジア、北アメリカ、南アメリカの順番で回るルート。同時期に多くの国を回ることによりさまざまな発見をした。夏真っ盛りアメリカからハワイ経由で真冬のニュージーランド、マウントクックに登れば凍てつく世界。オーストラリアのへそエアーズロックと周辺のオレンジ色の砂漠を走った後は南アフリカ・ケープタウン。白人で豪華な家に住む友人宅に寝泊まりした時は、多くの黒人が奴隷のように働いていた。同じアフリカでもケニアでゲームサファリを楽しんだ後のエチオピアでは、ゴミの中の貧民街で最低限の生活を目の当たりにした。エジプトでは局部的に盆地状の砂漠で1人東西南北を見失いアリ地獄を体験。スロバキアと分離した民主化直後のチェコの民宿では経済事情が悪く何でもお土産として勧められた。早朝から夜遅

くまで動き回って1ヶ月、ギリシャで急に体調を崩し、まともな食事をしていなかったことに気づく。ノルウェー、白夜のベルゲンでは町全体が夏休みでホテル以外静まり返った町を歩き、ほとんど昼間の中をスウェーデン、フィンランドと移動。ソ連からロシアに移行したばかりのモスクワで多少両替すると、10センチ厚ほどのルーブル紙幣を渡された。その後喧噪のパキスタン、インドを巡りネパールでエベレストを昇った後は台湾で多少楽しみ日本に4日間滞在。再びアメリカを経て今度は南米。ペルー・クスコ経由で空気の薄い中マチュピチュの空中都市を眼下にした。ボリビア、ウルグアイ、パラグアイ、アルゼンチンとスペイン語に悩まされた後ブラジルのリオで一息ついてから振り出しのアメリカ西海岸へ。その時々政治・経済環境により人生を楽しみ、翻弄される人々の姿を目の当たりにし、季節、環境や文化の違いを肌で感じ、地球の面白さを体で受け止めた3ヶ月間であった。この経験が何か役に立ったかと言われると返答に窮するが、少なくともどのような出身国の人も抵抗なく合う術を身につけたように思っている。

この機会に仕事関係を含めた訪問国を数えてみたら67カ国。よく行ったと思う反面、現在の世界約200カ国から見ると3分の1、世界制覇への道のりはまだまだ遠い。

現在家族と共に住むドバイの家、寝室の壁一面に高さ2.5メートル、幅4メートルの大きな世界地図を貼っている。そして、これまでに住んだ町には赤丸のシール、訪問した町には黄色のシールを付けている。既に天命を知るはずの50歳となった現在も生涯100カ国制覇を当面の目標としているが、最近ドバイから中東近隣国を行き来するばかりでなかなか数が増えない。ここは次世代の息子と娘に全世界制覇の夢を託すべきか。2人は0歳の時から海外を経験し、14歳と12歳で既に各々2冊目のパスポート。さまざまな人種の集まるドバイの特徴で、通っているインターナショナル・スクールの今年の生徒出身地は世界72カ国。色々な訛りの英語を話す友達との付き合いを見ていると非常に面白い。子供たちはそんなドバイで揉まれ世界制覇のポテンシャルだけは高めている。

忙しくて出張以外の旅行はままならない現在、毎日大きな世界地図を眺めながら今度はどこに行こうか。ベッドの上での世界旅行は既に地球百周を超えている。